

謝辞

定年退職の期を迎え、当初私は、晴れがましい行事は一切辞退するつもりでいた。日本史学専攻における前任・長上の方々でいうと、三浦圭一先生は五九歳で病歿され、山尾幸久先生は定年を待たずに退職された。川嶋將生先生は定年を全うされたが、すべての公式行事を固辞されたからである。一九九五年春、衣笠安喜先生の晴れやかなご退職を専攻主任としてお送りしてから、随分と日子を隔てたようにも感じていた。しかし周囲の徳澤とご厚情に逆らい続けるのは、私には限界があった。そしていったん応諾した以上は、多くを慣行通りに進めていただくことにした。

本論集についても、せっかくの機会であり、刊行会の皆さんとはかり、たんなる「献呈論文集」ではなく、一定のテーマのもとに学術的にも意義ある論集とすべく企図、案内を差し上げたが、それでは寄稿しにくいとの意見が寄せられ、結局は恒例に近いかたちでの論集となった。しかし、頂戴した玉稿・力作の数は四〇に迫り、内容・各論題目の上からも、実質的に当初の希望はほぼ達せられていると思う。別けても現役の院生等、若い層から少なからざる稿を得たのが、長く教職にあった身として嬉しい。他方、当初の全体テーマや執筆条件、そのほか余儀ない事情から寄稿を断念された方々も少なくないと聞く。定年を目前にしてつくづくと想うのは、そうした人々を含め、多くの皆さんから蒙った支援であり、交誼である。衷心よりの謝辞を申し上げる次第である。

本論集中、何れ劣らぬ力作・珠玉の作品が並ぶなかで、末尾を汚すことになった拙稿について、一言弁明を許されたい。本来なら自己の研究を総括するような内容が望ましいのであるうし、そのうえ「補論」という字句にも忸怩たる思いを禁じ得ない。しかし論中に触れたように、近年公表された櫻井陽子氏の論文は学界に大きな反響を呼び、学部卒業論文以来、該テーマにかかわる著作をものしてきた私としては、それへの対応なしには、定年という「卒業」儀礼を通過する気分には、どうしてもなれなかつたのである。読者のご海容に期待したい。

なお、私の定年退職にもなう一連の行事は、山崎有恒専攻主任をはじめ記念事業会の皆様（元木泰雄・西村隆・井上幸治・佐古愛己・谷昇・花田卓司各氏）のご努力により遂行されている。特に本論集の編集には、佐古准教授の手を煩わせた。ご自身の任期終了を目前にしての作業であり、本当に心苦しく思うと同時に、今後ますますの発展を願わずにはいられない。ただひたすら感謝の意を表するばかりである。

最後に、「定年」といっても、四月から研究・教育とまったく無縁になるわけではない。関係各位の旧に倍すご鞭撻とご理解とをお願いして、「謝辞」の筆を擱くこととしたい。

二〇一一年十二月十五日

杉橋隆夫

